

ラオスにおける知的障害者社会自立のための生活・就労支援プログラム
完了報告添付資料 事業写真

1. 生活支援



日本人専門家による指導

知的障害者センターでの生活支援への助言を行い、学習教材を使った支援方法を指導した。

又、個人の能力や特性に応じた学習方法の指導を行い、個別支援の大切さを伝えた。



個別支援計画作成の様子(知的障がい者センターにて)

本人・親・知的障がい者センタースタッフ三者が集まり、アセスメントを丁寧に行うことにより、個別支援計画の作成を行っている。本人の希望や意見が反映された内容になっていることが大切。



親の会開催

毎月1回実施。

当会や知的障がい者センターからの報告のみでなく、親からの報告や意見交換の場となっている。

当プロジェクトにおいて大切なことは「ADDP・知的障がい者センター・親」三者の協力である。



職業体験及びアクティビティ

知的障がい者センターの生徒を招き、就労体験

及び日中生活アクティビティとして、クッキー作り体験を行っている。訓練生にとっては自分が教える立場となることによって、精神的な成長に繋がっている。

2. 簡易職業訓練



Minna no Café での職業訓練

カフェでの就労にあたり基本的なマナーやエチケットをはじめ、お菓子作りに取り組んでいる。

現在では、ジョブコーチの指示がなくても次の作業を理解し、自ら動ける生徒もいる。

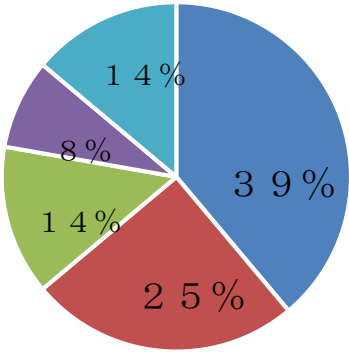


清掃反復練習

清掃は毎回反復練習することにより、技能の定着及び向上を目指す。外部での清掃活動を行うことにより、清掃活動のPRと啓発活動を

	行っている。
--	--------

3.ビエンチャン市への知的障がい者事情調査

 知的障がい者事情調査① ビエンチャンで暮らす、家で過ごしている16歳以上の知的障がい者を対象に、25名の家を訪問。生活調査及びニーズ調査を行った。	 ■ 働いて欲しい ■ 1人で生活できるようになって欲しい ■ 勉強して欲しい ■ 希望はない(何もできないから) ■ その他 ■ 現在よりも良くなって欲しい 知的障がい者事情調査② 「Q.親が子どもに望むこと」に対する調査結果
--	--

4.啓発イベントの実施



ラオファッションウィーク

知的障がい者訓練生がモデルとなり、ランウェイを歩いた。

堂々と歩く姿は観客を魅了し、盛大な拍手が会場を包んだ。



販売活動

イベント時にはブースを出展し、お菓子の販売を行っている。OJTを通じたお金のやりとりや接客などを通して販売に対してのスキルを伸ばす。また社会参加することによって、障がい者も社会の一員であること、働けることを世間に対して啓発する。